



筑紫女学園大学リポジト

北部九州真宗文化財調査報告 ～近世真宗のうみだした文化的環境～

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 知美, OGATA, Tomomi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/99

北部九州真宗文化財調査報告 ～近世真宗のうみだした文化的環境～

緒 方 知 美

A Report on the Cultural Properties on Shin Buddhism in Northern Kyushu : The State of Shin Buddhism Created in the Early Modern Period

Tomomi OGATA

1. はじめに

本稿の内容は、筑紫女学園大学の研究助成を受け、平成18年度から23年度までの6年間、筆者もその一員であった本学教員を中心とした研究調査団が、北部九州の浄土真宗寺院を対象として実施した文化財調査研究活動の、現在までの成果報告と今後の課題についてである^(注01)。

【表1】調査・訪問先の寺院・美術館・博物館（調査順）

調査年度	調査・訪問先
平成18 (2006)	鹿児島県歴史資料センター黎明館、吉野町公民館、知覧ミュージアム、西蓮寺（筑紫野市〈御笠組〉）、山江村歴史民俗資料館、楽行寺（人吉市）、熊本県立美術館（熊本市）、西念寺（水俣市）、八代市博物館未来の森ミュージアム（八代市）、光現寺（八代市）、大分県立歴史博物館、別府別院、大谷光瑞記念館、西光寺（別府市）、西念寺（別府市）
平成19 (2007)	正蓮寺（福津市〈宗像組〉）、西蓮寺（筑紫野市〈御笠組〉）、妙行寺（福岡市〈東本願寺派〉）
平成20 (2008)	信覚寺（朝倉郡〈夜須組〉）、淨蓮寺（宗像市〈宗像組〉）
平成21 (2009)	長源寺（嘉麻市〈嘉麻組〉）、淨円寺（嘉麻市〈嘉麻組〉）、善照寺（嘉麻市〈嘉麻組〉）、嚴淨寺（朝倉市〈上下組〉）、万徳寺（朝倉市〈上下組〉）、明正寺（飯塚市〈西嘉穂組〉）、安樂寺（飯塚寺〈西嘉穂組〉）
平成22 (2010)	明円寺（飯塚市〈西嘉穂組〉）、西光寺（飯塚市〈西嘉穂組〉）、長明寺（嘉穂郡桂川町〈西嘉穂組〉）、長教寺（嘉麻市〈嘉麻組〉）、仙林寺（嘉麻市〈上下組〉）
平成23 (2011)	萬行寺（福岡市〈福岡組〉）

【表1】「調査・訪問した寺院・美術館・博物館」にあげたように、本調査研究の初年度は、これまでに真宗に関わる展覧会を企画した美術館・博物館などを中心に訪問し、平成19年度・20年度は福岡県下の真宗寺院を数か寺調査した。平成21年度・22年度は、調査メンバーに真宗史研究者を迎える、九州における真宗の伝播史の研究に取り組むこととし、嘉麻・穂波地方を中心として真宗寺院の文化財調査をおこなった。さらに平成23年度は、触頭であった萬行寺調査に着手した。また、本学の調査研究の方針を定めるため、調査と並行して年1回の研究会を開催し、真宗文化財に關わる研究者から研究の現状と課題を教示していただいた^(注02)。

6年間の活動をふまえたうえで本調査研究の成果を概括すると、大きく二つの研究領域にわたるといえる。一つは真宗史の領域である。児玉識氏の指摘されるように、東国や畿内とは異なる九州の真宗史研究が既存の真宗史の再構築に果たす役割は小さくないと考えられるが^(注03)、その九州真宗史研究にとって寺院所蔵の文化財は重要な素材となるだろう。もう一つは、美術史も含めた文化史的な研究領域である。これまで見過ごされてきた真宗寺院の膨大な文化財調査の成果を新たな材料として組み込むことで、地域の美術史を把握しなおすことができると考えられる。

本稿では、本調査研究で確認された真宗寺院所蔵作品のうちデータ整理の完了した作品全体の中から、とくに真宗史や地域文化史研究の素材として着目される作品を選んで紹介し、それらの作品をとおして考えられる近世真宗のうみだした文化的環境について考えたい。

2. 嘉麻・穂波地方における真宗寺院所蔵作品

作品紹介に先立ち、調査対象とした嘉麻・穂波地域の歴史と地理を概観しておきたい。

嘉麻と穂波はともに古代から近代の筑前国および福岡県の郡名であり、江戸時代には福岡藩と秋月藩の領地であった。明治29(1896)年に合併して「嘉穂郡」となっていたが、現在は再び分離して嘉麻市と飯塚市、一部が桂川町となっている。福岡県中央部の遠賀川・穂波川の流れる盆地であり、北方以外の三方を山に囲まれた純農村地帯である。本地域には、江戸時代、小倉から長崎に到る基幹道路である長崎街道と、より古く中世に遡る秋月街道が並走しており、長崎街道沿いに飯塚・内野、秋月街道沿いに大隈の宿場があった【図01】。軍事・政治・経済の要地であり、天正15(1589)年には豊臣秀吉が大隈城(益富城)【図02】で秋月氏を落としている。明治以降おおくの炭鉱が開かれたが現在までにすべて姿を消している。

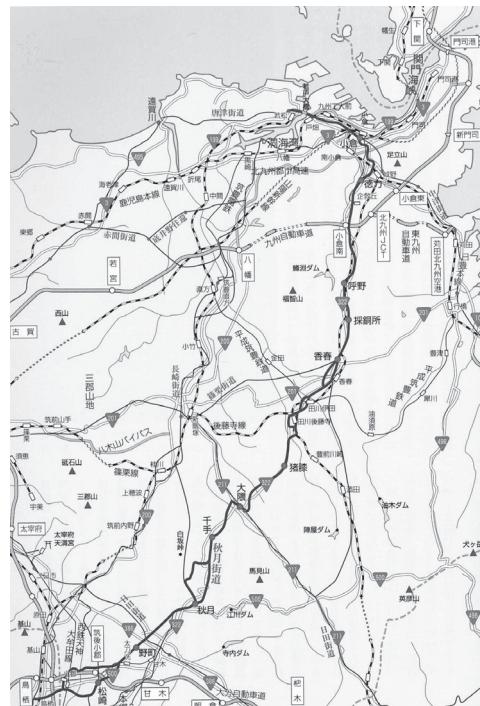


図01 九州の街道

アクロス福岡文化誌編纂委員会編『街道と宿場町』
(海鳥社、2007) より引用

大正13（1924）年に刊行された『嘉穂郡誌』によれば、本地域の寺院として、真宗寺院33ヶ寺、大谷本願寺派1ヶ寺、浄土宗寺院13ヶ寺、曹洞宗寺院11ヶ寺、日蓮宗2ヶ寺、天台宗5ヶ寺、真言宗2ヶ寺をあげている。全体で67ヶ寺のうち真宗寺院が33ヶ寺にのぼり、約半数を占めている^(注04)。現在は、この地域の西本願寺派の真宗寺院は、嘉麻組28ヶ寺、西嘉穂組15ヶ寺を数え、合わせて43ヶ寺となる。大正から90年弱の間に10ヶ寺増えている。

近世地誌の加藤一純編『筑前国続風土記附録』、青柳種信編『筑前国続風土記拾遺』や明治13（1880）年の『福岡県地理全誌』、本願寺から末寺への本尊の授与記録である『木仏之留』や『御影様之留』によれば、本地域には、天正年間（1573-92）を筆頭に、17世紀にはいって西本願寺より寺号木仮許可をうけたと伝える寺院が多い^(注05)。また、天正15（1587）年の秀吉西征の時に下向した教如上人が「寓宿」（淨円寺）、「対面」（善照寺）したと記される寺院があることや^(注06)、秀吉が大隈城降伏の際に助勢した村民に賜ったという華文刺縫陣羽織（国指定重要文化財）^(注07)と文書（嘉麻市指定文化財）^(注08)が大隈町に伝わることなどが真宗史のうえで着目されよう。

本調査では、史料などから真宗史研究に関わると考えられる寺院を中心に調査を行ってきた。調査対象寺院は、嘉麻組5ヶ寺、西嘉穂組5ヶ寺、加えて近隣の宗像組2ヶ寺、上下組2ヶ寺、夜須組・御笠組・福岡組と東本願寺派各1ヶ寺の合計18ヶ寺である。調査データの整理が完了し、すでに『西国浄土真宗文化財調査研究報告書（1）』および『同（2）』（以下、報告書と呼ぶ）に掲載した作品は12ヶ寺分、約200件を数える^(注09)。

これらの作品を性格の上から3群に分類して紹介する。第一に真宗伝播を跡づける真宗独自の作品、第二に真宗関係でない通仏教的な作品、第三に非宗教的作品である。【表2】「嘉麻・穂波地方を中心とした真宗寺院所蔵作品リスト（抜粋）」には、年紀銘のある作品や着目すべき作品をジャンルごとにまとめている。以下、表にしたがい作品を取り上げる。

【表2】嘉麻・穂波地方を中心とした真宗寺院所蔵作品リスト（抜粋）

		主要作品【作品数】	所蔵寺院（『報告書』作品番号、年紀銘・作者など） ※本地域以外の所蔵作品
① 真宗 独自 の 仏教 的 文化 財	絵 画	阿弥陀如来像 (方便法身尊像) 【4幅】	万徳寺（No.148、慶長10〈1605〉年の木仮裏書と共に保管） 淨円寺（1）（No.94） 淨円寺（2）（No.95、法如裏書） 西蓮寺（No.53）
		親鸞聖人像【7幅】	明円寺（No.186、文明8〈1476〉年蓮如裏書、真向） 長源寺（No.68、寛永18〈1624〉年良如裏書） 淨蓮寺（No.62） 嚴淨寺（No.129・No.130、寛永1〈1624〉年准如裏書別表装） 万徳寺（No.149、寛永14〈1637〉年良如裏書別表装） 明正寺（No.164） 善照寺（No.110） ※熊本県立美術館（No.18、証如裏書）



図02 大隈城跡

アクロス福岡文化誌編纂委員会編『街道と宿場町』（海鳥社、2007）より引用

絵画	蓮如上人像【6幅】	明円寺 (No.188、寛永2〈1625〉年准如裏書) 淨蓮寺 (No.63) 万徳寺 (No.150、文化10〈1813〉年本如裏書) 巖淨寺 (No.131、天保2〈1831〉年広如裏書) 明正寺 (No.165) 善照寺 (No.111)
	顕如上人像【3幅】	善照寺 (No.112、慶長9〈1604〉年准如裏書) 巖淨寺 (No.132、慶長17〈1613〉年) 万徳寺 (No.153、慶長18〈1613〉年准如裏書および箱蓋のみ現存)
	親鸞聖人絵伝【9具】	淨円寺 (No.96、正保2〈1645〉年) 西蓮寺 (No.54、享保5〈1720〉年) 善照寺 (No.117、享保6〈1721〉年寂如裏書) 巖淨寺 (No.137、宝暦10〈1760〉年法如裏書) 明円寺 (No.194、宝暦3〈1753〉年法如裏書) 淨蓮寺 (No.64、文永4〈1821〉年) 明正寺 (No.166、大正5〈1916〉年) 万徳寺 (No.151、正徳5〈1715〉年寂如裏書) 長源寺 (No.70)
	聖徳太子像／七高僧像【各8幅】	巖淨寺 (No.138・No.140、寛永1〈1624〉年准如裏書別表装) 淨円寺 (1) (No.97・No.98、1625年) 善照寺 (No.118・No.120、寛永18〈1641〉年良如裏書) 淨蓮寺 (No.65・No.66、慶安3〈1650〉年) 善照寺 (2) (No.119・No.121) 西蓮寺 (No.55・No.56) 明正寺 (No.167・No.168) 明円寺 (No.195・No.196、良如裏書、寂如印)
	彫刻	阿弥陀如来立像【10躯】 善照寺 (No.109、室町時代カ、納骨堂内安置) 正蓮寺 (No.38、「勝蓮社起誓上人」など胎内文書銘) 信覚寺 (No.48、寛永19〈1642〉年銘胎内文書) ほか省略
	書蹟・聖教など	六字名号【5幅】 信覚寺 (No.50) 正蓮寺 (No.42) 淨円寺 (1) (No.102) 淨円寺 (2) (No.103、明如筆〈第21世〉) 善照寺 (No.122、明如筆〈第21世〉)
	御文章【3部】	正蓮寺 (No.45、証如版〈第10世〉、第五帖のみ) 明正寺 (No.171、文如版〈第18世〉) 安樂寺 (No.172、明如版〈第21世〉) ※別府西念寺にもあり(法如版〈第17世〉)
	月輪殿浄土三部経【2部】	善照寺 (No.123、安政1〈1854〉年) 淨円寺 (No.104、安政1〈1854〉年) ※別府市西念寺 (No.38、安政3〈1856〉年))
	工芸	信覚寺「焼印」(No.52、「本願寺譜鎮西弘布事務所印」)
②通仏的文化財	絵画	明正寺「涅槃図」(No.169、益真斎守口筆) ※水俣西念寺「涅槃図」(No.23、緒方安清・吉田良久筆)
	彫刻	善照寺 (No.109、室町時代カ、納骨堂内安置) 正蓮寺 (No.38、「勝蓮社起誓上人」など胎内文書銘)
	工芸	巖淨寺「花瓶」(No.142、慶長17〈1612〉年「慶福寺改巖淨寺慶長十七年起」「正善」ほか銘) 長源寺「鐘」(No.93、昭和23〈1948〉年、井沢治助鑄造、凌雲願) 安樂寺「舍利容器」(No.174)

③ 非宗教的文化財	絵画	莊嚴画	淨円寺「本堂天井画墨龍図」(No.101、天保13〈1844〉年カ、齊藤秋圃カ) 淨円寺「杉戸絵（中国人物）」(No.99、石南園筆)
	扁額	善照寺「本堂額『覓王場』」(No.125、明治15〈1882〉年、南渓筆) 淨円寺「山号額『雲霖山』」(No.106、仙崖筆)	
	鑑賞画	長源寺「宝雲著讚月潭上人画像」(No.80、文政13〈1830〉年、宝雲筆) 淨円寺「貼交屏風」(No.100、天保6〈1835〉年含む、仙崖・宝雲・南渓・僧樸ほか筆)	
	彫刻	淨蓮寺「武丸正助木像」(No.61、文化3〈1806〉年徳園作と『宗像郡誌』にあり)	

① 真宗独自の作品

近世真宗では、末寺からの申請により本山が本尊や聖教などを免物として下賜するというシステムが確立されていた。その免物が真宗独自の作品にあたる^(注10)。ジャンル別にみると絵画としては、阿弥陀如来像（方便法身尊像）、祖師像、歴代門主像、親鸞聖人絵伝、聖徳太子および七高僧像など、彫刻としては阿弥陀如来像、書蹟・聖教としては名号や御文章、九条家蔵版浄土三部經などがあげられる。ここでは、真宗史研究の上で着目される、1600年代の比較的早い時期の年紀銘を持つ作品を中心にみていく。

調査で確認した阿弥陀如来（方便法身尊像）は4幅である。淨円寺に2幅^(注11)、万徳寺に1幅【図03】^(注12)、西蓮寺に1幅^(注13)であり、そのうち万徳寺のものは慶長10（1605）年の木仏裏書と共に保管されている。

親鸞聖人像は7幅。明円寺本【図04】^(注14)は文明8（1476）年銘をもつ真向きの御影であるが画面には後世の補筆が認められる。次で古い年紀銘をもつ作品は、寛永18（1461）年良如裏書のある長源寺本【図05】^(注15)である。

歴代門主像のうち古い年号をもつのは蓮如上人像と顕如上人像である。蓮如上人像は6幅で、そのうち最も古い作品は、寛永2（1625）年の准如裏書のある明円寺本【図06】^(注16)であ



図03 万徳寺蔵阿弥陀如来像
および木仏裏書



図04 明円寺蔵親鸞聖人像



図05 長源寺蔵親鸞聖人像



図06 明円寺蔵蓮如上人像



図07 善照寺蔵顕如上人像



図08 厳淨寺蔵顕如上人像

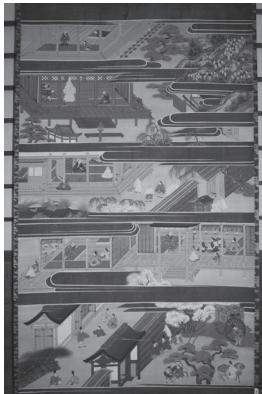


図09 淨円寺蔵親鸞聖人絵伝



図10 厳淨寺蔵聖徳太子



図11 正蓮寺蔵阿弥陀如来像

九条家蔵版浄土三部經が本堂に掛ける御下札とともに、また別府の西念寺では安政3（1856）年の再版が確認された^(注28)。

工芸としては、信覚寺に「本願寺鎮西弘布事務所印」がある^(注29)。

これまでみてきた真宗独自の作品のうち、善照寺・嚴淨寺・万徳寺に伝えられる慶長年間の准如裏書を持つ顕如像の存在は、本地域への真宗伝播の時期が、近世地誌の記述から大きく逸脱していないことを示す。

絵画作品は総じて本願寺の絵師による規格的作品であり画一的表現であるが、彫刻作品に関し

る。顕如上人像では、准如裏書本を2幅調査した。慶長9（1604）年の善照寺本【図07】^(注17)と慶長17（1612）年の嚴淨寺本【図08】^(注18)である。顕如像ではほかに、慶長18（1613）年の裏書と箱のみ残る万徳寺本^(注19)がある。

親鸞聖人絵伝は9具調査したが、正保2（1645）年の淨円寺本【図09】^(注20)が最古の年紀銘作品である。

七高僧および聖徳太子像は各8幅調査したが、最も古い作品は寛永元（1624）年の嚴淨寺本【図10】^(注21)である。

彫刻では、制作年代が室町時代にさかのぼるとみな

せる善照寺像^(注22)、付属の胎内文書に浄土宗の独自の法号である「勝蓮社」とあることから浄土宗寺院より移坐されたと考えられる正蓮寺像【図11】^(注23)、胎内文書より寛永19（1642）年に京都七条の仏師が制作したことが明らかとなる信覚寺像^(注24)を特筆すべき作品として挙げる。

書蹟・聖教としては、名号では六字名号を5幅調査したが、そのうち信覚寺本^(注25)・淨円寺本^(注26)には、蓮如筆の箱書や伝承がのこる。御文章のうち古いものは第五帖のみ伝わる証如版の正蓮寺本^(注27)である。善照寺と淨円寺では、

安元元（1854）年の月輪殿九条兼実の650回忌に制作された

九条家蔵版浄土三部經が本堂に掛ける御下札とともに、また別府の西念寺では安政3（1856）年の再版が確認された^(注28)。

これまでみてきた真宗独自の作品のうち、善照寺・嚴淨寺・万徳寺に伝えられる慶長年間の准

如裏書を持つ顕如像の存在は、本地域への真宗伝播の時期が、近世地誌の記述から大きく逸脱し

ていないことを示す。

絵画作品は総じて本願寺の絵師による規格的作品であり画一的表現であるが、彫刻作品に関し

ては、本願寺の仏師による典型的作風の信覚寺像とならび、古くからの伝来仏と考えられる善照寺像、他宗から移坐されたと考えられる正蓮寺像など多様性がある。本願寺は、木仏については支障のない限り古仏利用を許していたとされるが、その方針を実作品を通して確認することができる^(注30)。

② 通仏教的作品

通仏教的作品のうち絵画としては、明正寺の涅槃図【図12】^(注31)に画師の落款印章があり着目される。作者「益真斎」については不明であるが、画風は堅実で、狩野派系の要素が認められる。釈迦の枕もとに数珠を繰る尼が大きく描かれており【図13】、同様の図像の先例から、この女性は本作品の発願者であると推定される。涅槃図では他に、水俣西念寺の作品が、細川藩御用絵師の緒方安清・吉田良久の手になるものとして知られる^(注32)。

彫刻では、先に①の真宗独自の作品で挙げた阿弥陀仏像の古仏（善照寺像）や移坐像（正蓮寺像）をこの②の通仏教的作品の分類に含むことができる。

工芸としては、史料として着目される作品をあげる。厳淨寺の花瓶^(注33)には「慶福寺改厳淨寺／慶長十七年起」「正善」などの銘があり、本寺が慶長17（1613）年の正善のころ寺号を慶福寺から厳淨寺に改めたことが知られる。長源寺の鐘銘^(注34)は、戦時中の供出で失われた梵鐘を、終後の昭和23（1949）年、土師雲祥の時に門信徒衆らの協力により新鋲したと伝える勸学凌雲の文章である。安樂寺の舍利容器^(注35)は、平成6年の本堂の修理時に発見された大谷光瑞由来の舍利を安置したものであることが寺院史料から知られる。

このように通仏教的作品は、先にみた真宗独自の作品とは異なり、作品のジャンル・表現とともに多様で銘文の内容も多岐にわたるため、美術史も含め、幅広い歴史学の素材となる。

3. 非宗教的作品の美術史的考察－莊嚴画・鑑賞画・肖像彫刻－

非宗教的作品について、とくに莊嚴画と鑑賞画と肖像彫刻を取り上げ、美術史的視点で見ていく。

本願寺の莊嚴はそのほかの法式とともに、寂如代（1662-1725）とくに親鸞450回忌（1711）を期に大規模化し盛大となったとされ^(注36)、度重なる再建を経た現在の本山には、江戸時代をとおして活躍した京の絵師の障壁画が一同に会している点が特徴とされる^(注37)。末寺でも、本山に倣い、襖絵、天井画、欄間などの莊嚴に力を注いでいる。実際に本調査の対象とした真宗寺院の本



図12 明正寺蔵涅槃図



図13 明正寺蔵涅槃図部分

堂の多くは、正面に扁額をかけた堂々とした正面觀をもち、内部は、内陣は壁や天井を金箔で覆い床を一段高くした仏のための空間として、外陣は内陣から襖で隔てられた礼拝者のための空間として、それぞれの目的に応じてつくられていた。

まず、本堂の莊嚴画や扁額について取り上げる。

淨円寺には、嘉麻市の文化財に指定されている本堂天井画の伝齊藤秋圃筆「墨龍図」【図14】^(注38)、本堂扁額の仙崖筆の「雲霖山」^(注39)、庫裏杉戸絵の石南園筆「中国人物図」^(注40)などの装嚴画が伝わっている。

「墨龍図」は、淨円寺の7間4面の本堂の外陣天井板に直接墨で描かれている。外陣天井3区に1頭ずつ、全部で3頭の龍が配されている。龍の輪郭線は抑揚をつけ、渦巻く雲は水墨技法で表し、動きと奥行きを表現している。本天井画を描いたとされる齊藤秋圃は、秋月藩お抱え絵師をつとめた画家である^(注41)。作者伝承の典拠については未確認であるが、同じく龍をモティーフとした秋圃作の現人神社所蔵絵馬【図15】^(注42)と比較すると、龍の形態と描法、ウロコや毛の生えた爪などの細部描写が近く、同筆と判断して差し支えないようである。作品は現存しないが、秋圃は、秋月藩主黒田長舒に仕えていた文化3（1806）年に、太宰府書画展覧会に旋龍図を描いたことがある。淨円寺本堂の上棟された天保13（1844）年は、秋月藩のお抱え絵師であった秋圃が太宰府に隠居していた頃で75歳にあたる。本天井画が秋圃の作であれば、記録より知られる秋圃の多くの作画歴の中でも大きさの点で突出しており重要な研究対象となる。一般的に龍図天井画は、禪宗寺院の法堂などの重要な宗教空間を飾る例が多く知られるが、そのモティーフが、信者の空間として本来ならば莊嚴の対象とならないはずの真宗寺院の本堂外陣に描かれた点でも興味深い^(注43)。

同じ淨円寺本堂の扁額「雲霖山」を書いた博多聖福寺の住職で画僧として知られた仙崖^(注44)と秋圃は交友関係にあり、共同制作した作品も現存している。仙崖の書は、同寺所蔵の貼交ぜ屏風にも含まれている。



図14 淨円寺本堂天井画墨龍図



図15 現人神社蔵張良・黄石公図絵馬

福岡県立美術館学芸課 魚里洋一 企画・編集
『[特別展] - 筑前四大画家の時代 - 斎藤秋圃と筑前の絵師たち』
(福岡県立美術館、2002) より引用



図16 善照寺蔵本堂額『覚王場』

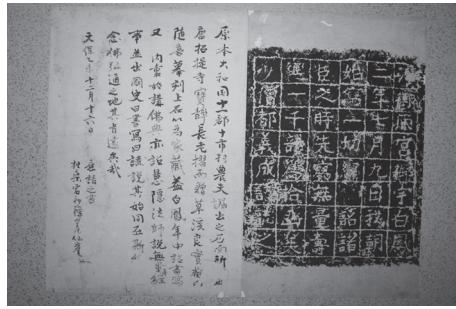


図18 浄円寺蔵貼交屏風のうち墨拓お
よび仙崖墨跡



図17 長源寺蔵宝雲著讚月潭上人画像

善照寺本堂の扁額「覚王場」【図16】^(注45)は南渓の書である。南渓は、のちに触れる長源寺の宝雲と共に18世紀後半から19世紀に活躍した真宗の学僧である^(注46)。本扁額は明治15（1882）年に彼の筆跡を用いて制作されたことになる。

次に鑑賞画についてみてみる。

まず、長源寺所蔵の「月潭上人画像」【図17】^(注47)をあげる。本作品に贊をつけた宝雲は、本寺の住職をつとめた江戸時代の学僧で、『嘉穂郡誌』名僧の項では浄土宗2祖聖光上人とななり取り上げられた著名な人物である^(注48)。本作品は、長源寺に伝わる宝雲墨跡のなかで、唯一絵画を伴った作品である。内容は文政13（1830）年に亡くなった7歳年上の学友「月潭上人」を悼むものである。

淨円寺所蔵の貼交屏風【図18】^(注49)には、宝雲の墨跡や消息、彼と並び称された南渓の短冊、宝雲と南渓の共通の師である京都宏山寺住職の僧樸^(注50)の墨跡、仙崖の無量寿經墨拓本によせた文章などが含まれている。師弟や同僚の関係にあった真宗の学僧間にとどまらず、宗派を超えた僧侶や文人の書画が残されており、本寺が知識人たちの交流の場となっていたことがわかる。

最後に淨蓮寺所蔵の武丸正助木像【図19】^(注51)をあげる。柔軟な表情の剃髪した老人の羽織姿の正座像である。『宗像郡誌』には文化3（1806）年に仏師種徳園が作ったとある。種徳園については不明であるが、その安定した技術力から専門仏師と推定される。

武丸正助（1671-1757）は、筑前国の孝子として知られた人物である。すでに存命中の享保14



図19 浄蓮寺蔵武丸正助木像

(1729) 年、藩儒竹田直定が『筑前宗像郡孝子武丸正助伝』、さらに寛保3（1743）年に『筑前宗像郡孝子良民伝』を著して紹介し、没後の寛政元年（1789）に幕府編纂の『孝義録』に掲載された。そして没後100年余の安政5（1858）年、僧純編『妙好人伝』に「筑前正助」として伝記が収録された^(注52)。

真宗の在家篤信者である妙好人の伝記集成『妙好人伝』は、宝曆3（1753）年の仰誓編『親聞妙好人伝』を増補し江戸時代だけで5回刊行されており、各編纂者の意図により妙好人の取り上げられ方が変化していることが指摘されている^(注53)

が、正助伝の収録された僧純編『妙好人伝』に関しては、天保改革以後の本願寺の「愛山護法」「公儀尊重」の姿勢が反映しているとする意見がある^(注54)。

確かに正助伝の内容は、竹田直定著『筑前宗像郡孝子武丸正助伝』(1729年)と『孝義録』(1789年)から、僧純編『妙好人伝』(1858年)へと大きく変化している^(注55)。前者2著と比べ後者は省略が多く文章量がほぼ三分の一に減じているが、『妙好人伝』の末尾に、前者にはなかった内容が付加されている。すなわち、正助没後の国主と法主による顕彰行為と、正助が深く弥陀の本願を信じて生涯浄蓮寺に参詣していたという信仰態度を述べる部分である。儒者の竹田直定が見出した孝子正助が本願寺の妙好人として取り込まれていく過程を具体的にたどることができる。

武丸正助木像は、俗人のしかも百姓の肖像彫刻という近世には珍しい作例であるが^(注56)、本作品は触頭の萬行寺で行われた正助の50回忌に際して制作されたという^(注57)。作品の制作背景や正助伝の変化などの検討は、妙好人の個別の事例としてだけでなく『妙好人伝』研究全体にも資するであろう。

4. 近世真宗のうみだした文化的環境

これまでの作品検討から浮かび上がる近世真宗のうみだした文化的環境とは、本山のミニチュアのような莊厳された空間であり、真宗の免物である彫刻・絵画などが配される一方で、藩のお抱え絵師ほか地域の絵師が自由に腕を振るい^(注58)、宝雲や南溪などに代表される学僧が門徒への教化をおこなう一方で、彼ら広い活動領域をもつ僧たちがその知識と教養をもって他宗の僧侶なども交えて文人的活動をおこなう場であった。本地域の真宗寺院所蔵作品に、美濃国で生まれ諸国行脚し博多聖福寺の住職として活動していた仙崖や、京都で生まれ滝沢馬琴とも面識のあった文雅の世界の体験者である齊藤秋園の伝承作が含まれる点は象徴的である。地域の真宗寺院は、真宗の教化の世界と文雅の世界の接点として、また都文化と地方文化との接点として機能する文化的環境であったといえよう。

嘉麻・穂波地方において寺院の約半数を真宗が占めていたように、本宗派は江戸時代の寺請制度のもとでの北部九州最大の宗派であり、信仰面のみならず生活文化の面でも多くの人々に影響

を与えていたはずである。本学で実施してきた北部九州真宗寺院の文化財調査は、対象寺院も作品も限定されており、調査方法・研究分析ともにいまだ十分ではないが、その成果を一瞥するだけでも、真宗寺院が地域の文化－その性格については検討の余地があるが－を生み出す場として機能していたことを推定させるに十分であろう。

地域における真宗寺院の調査は、政治や経済を主とする地域史の素材や、宗派関連の資料の探索のためになされることはあっても、美術史学分野に関しては立ち遅れていた。その理由は、美術史学においては作品の美的価値を問題とするため、近世以降の作品がほとんどでしかも免物という画一的表現の作品に価値をおく真宗寺院を後回しにし、より古くしかも主題・表現の多様な通仏教的作品や非宗教的作品を比較的多く所蔵する他宗派の寺院を優先してきたからである。しかし、江戸時代絵画史における版画作品や粉本による絵画制作の意義を考えるとき、画一的主題・表現の真宗関連の作品の存在を無視することはできないであろう。また、調査で明らかになったように、真宗寺院には真宗独自の作品以外にも通仏教的作品や非宗教的作品が多く所蔵されているが、それらを悉皆的に調査することで地域庶民が体験していた美術的環境を知ることができよう。

近世の地方文化を支える存在として、儒者を中心とした地方文人の存在が評価されているが^(注59)、彼らと近世真宗のうみだした人物とは、文化創造においていかなる異同があったのか。近世の地域社会において、庶民のうち大きな割合の人々が関与し、その地域の文化的活動の場として機能していた真宗寺院に伝わる作品を研究素材として組み込むことで、これまで藩主や有力寺院など権力の中心から考えられてきた地域美術史を、庶民の視点から把握しなおすことができるのでないだろうか。

(注01) 本稿は、平成23（2011）年11月26日土曜日に、本願寺福岡教堂において開催された筑紫女学園大学主催の北部九州真宗文化財調査研究シンポジウム「九州真宗のあゆみ－真宗文化財を通して－」での著者の調査報告原稿に加筆したものである。

(注02) 研究会については、本号掲載栗山俊之「博多萬行寺史料－七里三河法橋頼周関係史料その一」を参照。

(注03) 児玉識「真宗史再考－九州関係史料を素材に－」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』第21号、2010年。

(注04) 「第10章 寺院及び説教所」（嘉穂郡役所編纂『嘉穂郡誌』大正13（1924）年）

(注05) 地誌として、加藤一純・鷹取周成編、川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『筑前国続風土記附録』（文献出版、1977年）、青柳種信編著、広渡正利・福岡古文書を読む会校訂『筑前国続風土記拾遺』（文献出版、1993年）、西日本文化協会編『福岡県史 近代資料編 福岡県地理全誌』（福岡県、1988-1895）を、『木仏之留』と『御影様之留』については、千葉乗隆編『本願寺史料集成4 木仏之留 御影様之留』（同朋舎出版、1980年）を参照した。

(注06) 「淨円寺（中略）三世祐円カ時。天正中。東本願寺教如上人。当寺ニ寓宿アリ。木仏寺号ヲ許サレ。慶長九年甲辰。西派ニ転スト云。（後略）」（西日本文化協会編『福岡県史 近代資料編 福岡県地理全誌（三）』

- 平成1年7月)883-884頁。「善照寺(中略)秀吉公西征ノ時。教如上人。下向アリケレハ。当寺ニテ。対面アリ。(後略)」(西日本文化協会編『福岡県史 近代資料編 福岡県地理全誌(三)』平成1年7月)793頁。
- (注07) 嘉麻市蔵華文刺縫陣羽織、1領、桃山時代、国指定重要文化財(工芸)。
- (注08) 「17浅野・森連署」(嘉穂・山田社会教育振興協議会『嘉飯山文化財マップ』平成16年)
- (注09) 作品データは、西国真宗文化財調査研究プロジェクト編集『西国浄土真宗文化財調査研究報告書(1)』(筑紫女子大学・短期大学、2009年)、『同(2)』(2011年)に収録した。
- (注10) 免物には、本尊として尊号と尊像(画像、木像)、五尊とよばれる影像(木仏寺号、聖徳太子像、七高僧像、宗祖像、前住影)、六物(仏室、厨子、出仏壇、金張付、喚鐘、撞鐘)、聖教があり、一定の順序によって下付を受けねばならなかった。「第五章 教化と免物 一 本尊聖教の免許」(本願寺史料研究所編纂『本願寺史』第2巻、1968年)457-467頁。
- (注11) 浄円寺蔵阿弥陀如来像(方便法身尊像)(1)、1幅、江戸時代。(『報告書』No.94)裏書なし、包紙墨書「御本尊御絵像」、表箱蓋墨書「御加具箱」。浄円寺蔵阿弥陀如来像(方便法身尊像)(2)、1幅、江戸時代。(『報告書』No.95)表装背面墨書・墨摺「方便法身尊形／本願寺釋法如(花押)(墨摺)／願主釋(墨摺)道延(墨書)」。
- (注12) 万徳寺蔵阿弥陀如来像(方便法身尊像)、1幅、慶長10(1605)年の木仏裏書と共に保管。(『報告書』No.148)木仏裏書墨書・墨摺「釋准如(花押)(墨摺)／慶長十年乙巳九月十二日／願主万徳寺釋法春(墨書)」。本裏書については『木仏之留 慶長十年』(注05前掲書)26頁に記載されている。
- (注13) 西蓮寺蔵阿弥陀如来像(方便法身尊像)、1幅、江戸時代。(『報告書』No.53)裏書なし。
- (注14) 明円寺蔵親鸞聖人像、1幅、文明8(1476)年銘。(『報告書』No.186)表装背面貼紙墨書「親鸞聖人等身カ御影／本願寺釋蓮如〔(破損)〕／文明八丙申三月〔(破損)〕／願主釋〔(破損)〕」。金龍静氏よりシンボジウム発表の際、本作品の裏書中の割注を斜めに配する表記法は中世に遡りえないとご教示いただいた。
- (注15) 長源寺蔵親鸞聖人像、1幅、寛永18(1624)年。(『報告書』No.68)表装背面貼紙墨摺「〔(破損)〕本願寺親鸞聖人御影／釈良如(花押)／寛永十八載辛巳五月十二日(墨摺、数字と干支のみ墨書)／筑前国嘉摩組上白井村／長源寺常住物也(墨書)／願主(墨摺)明順カ」、箱蓋表面墨書「見大師御影 福岡県長源寺」。
- (注16) 明円寺蔵蓮如上人像、1幅、寛永2(1625)年。(『報告書』No.188)表装背面貼紙墨摺・墨書「蓮如上人真影／釋淮如(花押)(墨摺)／寛永二暮□月□日／門徒筑前国穂波郡／大分村明圓寺常住物(墨書)／願主釋(墨摺)□□(墨書)」
- (注17) 善照寺蔵顕如上人像、1幅、慶長9(1604)年。(『報告書』No.112)表装背面貼紙墨書・墨摺「本願寺前住釋顕如上人真影(墨摺)釋准如(花押)(墨摺)／慶長九暮甲辰七月廿日□之／筑前国嘉摩郡西郷村／善昭寺常住物也(墨書)／願主釋(墨摺)慶順(墨書)」、卷留墨書「顕如上人之御影像福岡縣嘉穂郡大隈町上西善照寺寶物」。
- (注18) 厳淨寺蔵顕如上人像、1幅、慶長17(1613)年。(『報告書』No.132)表装背面貼紙墨書「慶長十七年壬子四月廿四日／筑前国／□福寺常住物也／願主釋正善」
- (注19) 万徳寺蔵顕如上人像裏書、1巻、慶長18(1614)年。(『報告書』No.152)墨書・墨摺「顕如上人真影／釋

- 准如(花押)(墨摺)／慶長十八年癸丑卯月三日(墨書)／筑前国上座郡須川村／万徳寺常住物也／〔(剥落)〕／願主釋(墨摺)[(剥落)](墨書)」。
- (注20) 浄円寺蔵親鸞聖人絵伝、4幅、正保2(1645)年。(『報告書』No.96) 表装背面貼紙墨書・墨摺「大谷本願寺親鸞聖人之縁起／本願寺釋良如(花押)(墨摺)／正保貳載乙酉十一月十日(墨書)／※／願主釋(墨摺)祐存(墨書)」、4幅とも同文、第4幅のみ※に墨書追加「筑前国嘉麻郡椎木村淨円寺／常住也」。
- (注21) 厳淨寺蔵聖徳太子・七高僧像、2幅、寛永1(1624)年裏書き別装。(『報告書』No.138・140) 聖徳太子像原裏書墨書・墨摺「上宮太子御影／本願寺釋准如(花押)(墨摺)／寛永元暮甲子五月廿一日(墨摺、干支と数字のみ墨書)／筑前国上座郡菱野村／慶福寺常住物也／願主釋(墨摺)／正善(墨書)」、七高僧像原裏書墨書・墨摺「三朝高僧真影／本願寺釋准如(花押)(墨摺)／寛永元暮甲子五月廿一日(墨摺、干支と数字のみ墨書)／筑前国上座郡菱野村／慶福寺常住物也(墨書)／願主釋(墨摺)正善(墨書)」。
- (注22) 善照寺蔵阿弥陀如来像、1躯、室町時代。(『報告書』No.109)
- (注23) 正蓮寺蔵阿弥陀如来像、1躯、江戸時代。(『報告書』No.38) 胎内文書(1)墨書「南無阿弥陀仏(ほか十四名交名)」、胎内文書(2)墨書「寂静／了庵寿源信女／勝蓮社起眷上人／玄室知順童子靈位」、胎内文書(3)墨書「一蓮妙林信女百日」、胎内文書(3)裏面墨書「南無阿弥陀仏」。
- (注24) 信覚寺蔵阿弥陀如来像、1躯、寛永19(1642)年。(『報告書』No.48) 胎内文書(1)墨書「奉造立阿弥陀[]／(中略)／寛永十九年午壬五月九日／仏師京七条小寄／南左右衛門尉」、胎内文書(2)「□□奉加之云／(中略)／寛永十九年午壬五月九日」。
- (注25) 信覚寺蔵六字名号、1幅、時代不明。(『報告書』No.50) 木箱上蓋墨書「蓮如上人御真筆尊号／筑前国信覚寺」、木箱上蓋裏墨書「(前略)／昭和五十一年一月九日信覚寺住職釈淳心」、付属文書(1)御詫び状「昭和六十一年八月一日(後略)」、付属文書(2)御預り証「御預り証／一、蓮如上人御真筆／六字名号毫幅／右確ニ御預り致しました／昭和五十一年一月九日／三輪町野町／信覚寺／住職 渡邊淳心／総代 川上杠次・山見定之助・竹永吉助／東小田教覺寺様」。
- (注26) 浄円寺蔵六字名号、1幅、伝蓮如筆。(『報告書』No.102)
- (注27) 正蓮寺蔵御文章第五帖、1冊、室町時代。(『報告書』No.45) 最終紙墨摺銘「釋證如(花押)」。
- (注28) 浄円寺蔵九条家藏版三部経、4冊、安元1(1854)年。(『報告書』No.104) 各冊末尾墨摺・印章「九條殿御蔵版」(朱文方印)「月輪殿下六百五十回諱辰／御法会之次施此経於有縁／以表追遠之誠云」、被蓋箱蓋裏墨書「三部妙典九條閑白殿」、御下札墨書「□□□／三部妙典／御葩九条閑白殿」。善照寺本(『報告書』No.123)は同銘、西念寺本(『報告書』No.37)は阿弥陀経末尾奥書「安政丙辰冬／改正再上梓」「本願寺」(朱文方印)。鷺山智英氏の御教示によれば、本三部経は全国の真宗寺院に寄附されたようで、新潟県上越市内では、ほとんどの真宗寺院で、しばしば御下札を伴って確認されているという。高橋正隆「資料紹介・九条閑白兼実公六百五十回忌施入浄土三部経」『日本宗教文化史研究』2巻2号(1998年)参照。
- (注29) 信覚寺蔵焼印「本願寺鎮西弘布事務所印」、1個、近代カ。(『報告書』52) 被蓋桐箱(後補)蓋表銘「□(焼印) 信覚寺(墨書)」。
- (注30) 『本願寺通記』(公本定法録下)に、「木仏ハ御本山之仏師にて定之通彫刻仕候、尤自身致尊敬來候有縁之仏

像、御定に障り不申時者其儘依用、若御定に違ひ候時分改置候」とある。本願寺史料研究所編纂『本願寺史』第2巻（1968年3月21日）458頁。

- (注31) 明正寺蔵「涅槃図」、1幅、江戸時代。(『報告書』No.169) 画面向かって右下に落款・印章「益真斎筆」(墨書)「守□」(朱文方印)、卷留墨書「釋迦牟尼如来涅槃像／大正元年十月一日寄進 施主 飯塚市東町西兵八／同人妻フミ／昭和二十二年八月表具更生寄進 施主 同市新川町／石津興四郎／明正寺什寶」。涅槃図に尼僧姿の施入者を描き込む例として、愛知甚目寺本(鎌倉時代14世紀、重要文化財指定)、同無量光院本(貞治7〈1368〉年)がある。谷口耕生「162仏涅槃図作品解説」「同163」(奈良国立博物館編集『女性と仏教』2003年4月)248-249頁。
- (注32) 水俣西念寺「涅槃図」、1幅、江戸時代。(『報告書』No.23) 画面左下に落款・印章「安清筆」(墨書)「□□」(白文方印)「□□」(朱文方印)「良久筆」(墨書)「清谷」(白文瓢形印)「□□」(白文方印)、箱蓋裏墨書「釈迦如来涅槃像西念寺」。「矢野派系図」によれば、緒方安清は矢野派3代茂安(1673-1752)の11人の弟子の一人で和助と注記され、吉田良久は第4代雪叟(1714-1777)の多くの弟子の一人として新藏、円助の子、号青谷と注記される。なお、雪叟筆の涅槃図(宝暦3〈1753〉年)が熊本県広福寺に所蔵されている。『細川藩御用絵師・矢野派』(1996年、熊本県立美術館) 参照。
- (注33) 厳淨寺蔵花瓶、2口、江戸時代。(『報告書』No.142) 花瓶(1)外側口縁下部白色銘「慶福寺改嚴淨寺／慶長十七年起」、外側框部白色銘「筑前国上座郡菱野村正善」。花瓶(2)外側框部白色銘「喜以寺□志之村正善」。
- (注34) 長源寺蔵鐘、1口、昭和23(1949)年。(『報告書』No.93)陽銘「諸行无常／是生滅法／生滅々已／寂滅以樂」「曩年國難官命供出／寺院梵鐘終戦之後／門信徒衆悲其歎無／企圖新鑄巨資忽完／今茲陽春竣工慶讚／真可喜也略録事蹟／以貼後年□／有緣勸學凌雲誌」「宝珠山／長源寺／第十二世住職土師雲祥／□住同隼人」「南無阿弥陀仏」「京都 井澤治助鑄造」「昭和二十三年四月／奉讚／門信徒一同」。
- (注35) 安楽寺蔵舍利容器、1基、平成6(1994)年。(『報告書』No.174) 舍利容器框座陰刻銘「母安藤タマ子一回忌法要／平成六年七月二十七日寂／石原和子 田中恵美子 木下憲子 安藤孝人」。『野見山家・安楽寺のルーツ』(平成8〈1996〉年、高城尚子著、『報告書』No.183)には、本寺に大谷光瑞由来の舍利があるとの伝承があったが、平成6(1994)年の本堂(大正10〈1921〉年建立)修理時に、本尊床下の長方形の大石の下に、上部を削りぬいた石に納められた舍利3粒入りの水晶容器が発見され、そのうち1粒は舍利容器に安置し、あと2粒は石に埋め戻したことが記されている。
- (注36) 首藤善樹「第二章 荘厳の歴史」(豊原大成、千葉乗隆、梯實圓監修『浄土真宗本願寺派の莊嚴全書』四季社、平成8年8月5日増補改訂版)105頁。
- (注37) 金井祐子「華麗なる莊嚴空間－本願寺の障壁画－」(九州国立博物館編集『親鸞聖人750回大遠忌記念 本願寺展 親鸞と仏教伝来の道』2007年9月22日)202頁。
- (注38) 浄円寺「本堂天井画墨龍図」、天保13(1844)年ヵ、伝齊藤秋圃画。(『報告書』No.101) 本堂長押上板墨書「奉再建本堂一字／願主当山第十九世祐淳惣旦那中／干時天保十三壬寅歳／三月八日上棟／第二十世現住大襲代／棟梁(五名)／再建發起(五名)／大施主(六名)」。
- (注39) 浄円寺蔵山号額「雲霖山」、1面、江戸時代、仙崖筆。(『報告書』No.106) 墨書「扶桑最初禪窟厓書」方

印一顆（印文不詳）。

(注40) 浄円寺藏杉戸絵中国人物図、江戸時代、石南園画。(『報告書』No.99) 画面左端墨書「石南園」印章一顆（印文不詳）。

(注41) 斎藤秋圃については、小林法子「筑前関係絵師資料－斎藤秋圃略年譜－」(『福岡大学人文学論叢』第52巻1号、1993年8月)、福岡県立美術館魚里洋一企画編集『筑前四大画家の時代－斎藤秋圃と筑前の絵師たち－』(福岡県立美術館、2002年)、橋富博喜「斎藤秋圃研究(1) 斎藤家資料について」(『年報太宰府学』6号、2012年) を参照。

(注42) 現人神社所蔵「張良・黄石公団絵馬」、1面、嘉永6〈1851〉年奉納、斎藤秋圃筆。

落款・印章「行年八十四歳／土筆翁秋圃」「秋圃」(朱文長方印)、梓銘「奉獻／嘉永六癸丑歲」「四月吉日三宅觸」。注41魚里前掲書参照。秋圃作の当否判断に際し、小林法子氏、橋富博喜氏、魚里洋一氏に御教示いただいた。とくに現人神社蔵絵馬との龍モティーフの比較は魚里氏の御教示による。

(注43) 龍団天井画は、京都の東福寺、建仁寺、大徳寺、妙心寺、南禅寺、相国寺、天龍寺といった五山を中心とする禅宗の有力寺院の作例が知られる。福岡県の例としては、聖福寺仏殿に狩野永真作、同寺山門楼上に富田溪山(1879-1936)作、太宰府市の横岳山崇福寺別院仏殿にも作品が確認される。聖福寺監修・発行、西日本新聞社編集・制作『聖福寺主要団録』(1995年) 参照。

(注44) 仙崖(1750-1837.10.8)については、中山喜一朗『仙崖－その生涯と芸術(福岡市美術館叢書2)』(葦書房、1992年) 参照。秋圃と仙崖の交流については、文政2(1819)年仙崖尚愛の神授硯(聖福寺蔵)の内箱の檀主の一人として秋圃の名があることを初見とし、仙崖没後の天保10(1839)年に秋圃が聖福寺龍巖禪初より仙崖の頂相制作(聖福寺蔵)を依頼されるにいたるまで複数の事績があげられる。注42小林前掲論文参照。

(注45) 善照寺藏本堂額「覚王場」、1面、明治15(1882)年。(『報告書』No.125) 白色銘「覚王場／准水」「龍谷□□」(銀方印)「□□之印」(銀方印)「明治十五年／四月中旬／屏村旦中」。

(注46) 南溪(寛政2〈1790〉～明治6〈1873〉年)については、井上哲雄『真宗本派学僧逸伝』(永田文昌童、1979年) 266頁を参照。

(注47) 長源寺藏宝雲著讚月潭上人画像、文政13(1830)年、宝雲筆。(『報告書』No.80)

画面上部墨書「予亡友忍讓法師以文化五年四月比上与予同入本齋更從沙門大宣學／十不二門指要等上人卒業而帰六年大宣自京如備而講五教章予／去京而從上人所至自筑前七年予從大宣於筑後學法華玄義上人北／上学唯識論於越眷義八年從野山慈海於京學義林章因明論等九／日還鄉九年復北上学唯識速記於慈海予所北上学俱舍於肥法海八月／上人游紀州□事法□十年正月予在浪華上人至自紀七月予赴藝／十月上人結夏天龍寺十一年予帰郷上人所豐病而還上人有弟名忍／鎧十二年三月將北上此上人病篤不敢上人撫然而日豈為兄死故廢／□道業哉於是与予回北上五月書至京審上人以四月二十八日寂／之狀嗚呼上人修道精確操行謹嚴長予七歳在齋其名潭月云／友人 鳥水宝雲題」「宝雲」(朱文方印)、画面右端墨書「潭月法師之□神／文政庚寅孟春念二□□拝画」「龍橋」(白文楕円印)。

(注48) 宝雲(寛政3〈1791〉～弘化4〈1847〉年)については、注46井上前掲書278頁を参照。

(注49) 浄円寺藏貼交屏風、全13紙、2曲1双、天保6(1835)年含む、仙崖・宝雲・南溪・僧樸ほか筆。(『報告書』

No.100) ①墨蹟「高著眼」②和歌色紙「湖上月□□唐崎の一樹の松のかけにまで□は二の月を見る哉」
③和歌色紙「故郷花公散ささ波やしかの都のふることをむかしながらの花にとははや」④墨跡「虎法」「僧
僕」(白文長方印)「沐□」(朱文長方印)「山農之印」(白文長方印)⑤俳句短冊「来年は来年はとて暮らしけり」
「南溪」(朱文方印)⑥墨画山水「□春」(白文方印)⑦墨跡⑧和歌「春祝□青柳のなひくを人のこころとて
みちある御代の春ものとけき」⑨和歌「淀の渡りに時鳥をきく所□□わたし守はや舟渡せ一声のつ□を
もみむ山ほとときす」⑩嶋皋書「秋柳渡江春嶋皋」⑪宝雲詩「出樂之円□京□賞情一月幾以行祖国無限
□心猿□色声」「宝雲」(朱文円印)⑫宝雲消息⑬墨拓および仙崖墨蹟「清御原宮御宇白鳳／二年七月九日
我朝／始号一切経（アキ）／詔諸臣之時先写無量寿／経一千部□／拾□□小僧都義□□□之」(墨拓)「原本
大和国十一部十市村農夫掘出之石面所也／唐招提寺宝靜長老摺而贈草溪良実觀而／隨喜摸刻上石以為
家藏蓋白鳳年中詔書写／又内裏始講仏典亦詔慧隱法師説無量<寿>経／事並出国史曰書写曰講説其始同在
斯〔 〕／念仏弘通之地其旨遠矣哉／天保乙未十二月十六日 応請之書／扶桑最初禪窟仙崖（花押）」。

(注50) 僧樸（享保4〈1719〉～宝暦12〈1762〉年）については、注46井上前掲書278頁を参照。

(注51) 淨蓮寺蔵武丸正助木像、1躯、文化3〈1806〉年、伝仏師種徳園作。(『報告書』No.61)

(注52) 佐々木滋寛『純孝武丸正助』(淨蓮寺、1980年) 参照。文化3年（1806）正助の50年法会を博多萬行寺で
行い正助の木像を造り、安政3（1856）年正助100回忌を淨蓮寺で、翌年萬行寺でも行ったという。

(注53) 『妙好人伝』の研究史については、児玉識「『妙好人』および『妙好人伝』研究の経緯」(真宗史料刊行会編『大
系真宗史料 伝記編8 妙好人伝』2009年、法藏館) を参照。

(注54) 土井順一「妙好人伝の研究－新資料を中心として－」(百華苑、1981年)。注53前掲児玉論文459頁参照。

(注55) 例えば、前者では正助と妹が貧しい中でも父の好きな酒を求めたエピソードが3度も登場するが後者には全くなく、前者では正助が旱魃を天命と受け止めたことを語り、とくに『筑前宗像郡孝子武丸正助伝』では日の出を拝するなどの「天道」をおそれた具体的行為を挙げるが、後者では省かれている。竹田直定著『筑前宗像郡孝子武丸正助伝』(『日本教育文庫 孝義篇上』明治43〈1910〉年、同文館) 489-498頁、「孝
行者正助」『孝義錄卷之四十三』(『福岡県史資料続第1輯(伝記編1)』1931年、福岡県) 22-28頁、「筑前正助」
『妙好人伝』(注53前掲書) 287-289頁。

(注56) 林智康・井上善幸『妙好人における死と超越』(龍谷大学人間・科学・宗教オープンリサーチセンター、
2012年6月11日) に掲載されている妙好人の彫刻は、すべて近代の作であり、江戸時代にまで遡る作品
はみられない。

(注57) 注52前掲書参照。

(注58) 空間莊嚴に関わる作品としては、本稿で取り上げた作品の他に、仙林寺蔵萱島秀山画孔雀図襖、長教寺
蔵焼物細工孝子伝唐挟間、仙林寺欄間などがあげられる。とくに仙林寺に関しては「本堂唐狭間欄間彩
色寄附金簿」という文書ものこされ、本堂莊嚴に対する当時の門徒の意識が読み取れる。これらは『報
告書(3)』(2013年3月発行予定) で報告する予定である。

(注59) 塚本学『地方文人』(教育社、1977年10月)

(おがた ともみ：アジア文化学科 講師)